

寺井彩葉君学位請求論文審査報告

一 論文の構成

寺井彩葉君より提出された博士学位請求論文「『政治的なもの』の持続と断絶——ハンナ・アーレント政治理論の『破綻』と革命」の構成は、以下の通りである。

序章 問題の所在

第一章 先行研究と革命論に対する評価

第一節 革命論に対する全体的な評価

第二節 革命論に対する部分的な評価

第一部 革命論における持続性の問題系Ⅰ

——不死性の追求という課題

第二章 革命論の発展と持続性の問題

第一節 革命論の端緒

第二節 観想優位と労働優位の組み合わせに対する

批判

第三節 政治的なものの持続の時間制——不死

第二部 革命論における持続性の問題系Ⅱ

——「際限のなさ」批判

第三章 必然性と「際限のなさ」

第四章 制作の政治性

第一節 制作と世界に与えられる「際限」

第二節 制作の政治的な性質と非・反政治的な性質

第五章 革命論における「際限」

第一節 法における「際限（のなさ）」

——革命論における「制作」

第二節 アメリカ革命論における意見

第三節 アメリカ革命における世界性維持の失敗

第三部 革命論における持続性の問題系Ⅲ

——「伝統の終焉」という背景

第六章 アメリカ革命論後の思考

第七章 革命論における権威の喪失と全体主義批判

第一節 「伝統の終焉」と権威

第二節 政治的な思考とは何か

補論 アイヒマン論——判断と思考

終章「革命」という問題系——断絶に向き合う

二 内容の紹介

今回、寺井君が提出した博士論文『「政治的なもの」の持続と断絶——ハンナ・アーレント政治理論の「破綻」と革命論（以下、本論文と呼ぶ）』において寺井君はハンナ・アーレントによる政治的なものの持続性の議論に継続的な展開を見出し、それに対する評価を試みている。従来、わが国におけるアーレント研究においては、彼女の「始まり」の概念に注目した京都大学の森川輝一教授の研究が大きな影響力を有していたが、寺井君はこれに対峙させる形で持続性の重要性に着目する。「誕生の後には生／死があり、出来事の後には記憶／忘却があり、創設の後には持続／破壊がある」（四頁）からである。本論文はアーレントに抱かれている「始まり」や「出生 *naissance*」の政治理論家というイメージに対して、彼女の議論にも見出されるべき政治的なものが維持されるメカニズム、記憶と持続に対する関心を拾い出そうと試みるものである。

そのことを論証するために、寺井君は従来、比較的輕輕視されることの多かった『革命について』という著作を重視し、しばしばアーレントの名著とみなされる『人間の条件』とこの『革命について』という二つの著作が提示する議論のズレに注目し、そのズレがどうして生じたのか、

アーレントの苦闘の跡を追体験しようとしている。

アーレントの革命論をとおして持続性についての議論の展開を捉えることは、「破綻」に注目することであると寺井君は言う。それに関しては三つの点でアーレント政治理論は「破綻」したものであると指摘されている。第一に、アーレントの政治理論は、労働や制作ではなく、行為に注目した政治理論であるとの理解が一般的であるが、それが不可避に、しばしば非政治的、あるいは反政治的と名指しされる制作や思考を必要とする点、また第二にアーレントが標榜する「世界の共有」という構想は共通世界に生じる「裂け目」を前提とすることが、そして最後になによりもアーレントの政治理論が未完結のままに残されたことである。この三つの「破綻」を考察することなしには、「政治的なもの」を持続させることがいかに難題であるかを理解できぬまま、アーレント政治理論の真の意義を正しく評価することができずに各々の解釈者が勝手に自分の読みたようなアーレント像を描き出すことに終始することになってしまふというのが寺井君の主張である。この三つの破綻なるものを、それぞれ第一部、第二部、第三部で個別に検討を加えているのが本論文の全体的構成である。

以下、論文の内容を簡単に紹介する。

第一章は、先行研究によるアーレントの革命論に対する評価を、全体的なものとの部分的なものに分ける形で整理するものである。全体的な評価に関しては、アーレントの革命論が歴史的な実証性の欠如から評価に値しないと切り捨てる見解や、マルクス主義的革命観に対する革命の「政治的解釈」として肯定的にそれを評価しようとするアッカーマンの見解があるが、いずれにせよそれはアメリカ革命論の定説として後世に影響を与えるほどのものにはならなかった。

部分的な評価としては、彼女の「創設」についての議論に注目する研究や評議会論に着目する研究があるが、このどちらにおいても政治的なものの持続性に対する視点が不十分であったと寺井君は問題視している。また、「裂け目」[cracks]に注目する先行研究から窺えるのは「始まり」の政治理論家としてのアーレント像も二つに分裂しうるものであることである。それは「出生」の概念と絡めて「始まり」を日常的な連続性のもとで描き出すアーレント像と、「裂け目」を強調して非日常的で持続性をもたない断絶として革命を描き出そうとするアーレント像の分業である。そのうえで寺井君は革命論にとって重要なのは後者に他な

らないとして、三つの問題系からみずからの考察を開始するのである。

第一部は、政治的なものの持続性の議論を支える中心的枠組みである不死性の追求という主題に割かれている。寺井君は政治と哲学の分断、行為と思考の分断に対するアーレントの批判的考察が彼女の革命論の端緒であるとみなしているのだが、寺井君はアーレントの初期マルクス論のなかに不死性の追求という持続性の課題が隠されていると指摘している。不死とは、従来の哲学が希求し続けてきた、人間が手にすることのできない時間からの離脱を意味する「永遠」とは異なり、人間の時間への参入に他ならない。その結果、アーレントの革命論が革命という「始まり」のみを描き出しているのではなく、そこに持続性の問題が問われていることが指摘されている。

またその分析過程でこの問題の根底にはアーレントによる「観想優位と労働優位の組み合わせ」に対する批判があると指摘され、この批判が『人間の条件』における有名な労働 labor / 制作 work / 行為 action の区別に先行するところの、アーレントにおける政治的なものの持続性を支える主軸であると主張されている。(もつとも本論文の「評価」のなかで後述するように、この箇所(第二章第二節)

で用いられている「観想と労働の組み合わせ」という表現には、問題があるように思われる。

不死性の追求とは、神ならぬ人間の営みであり、だからこそ地上の生に関心を寄せる政治的なものの目標となりうると寺井君は主張する。このことが意味するのは、労働／制作／行為のうち、行為のみを政治的な活動とみなす従来の主流的解釈を相対化し、制作や思考のうちにも政治的なものを認めるべきであるということである。

第二部は持続性についての第二の問題系を扱うものであり、寺井君はアーレントによる革命に対する批判の要点として「際限のなさboundlessness」を概念化しようと試みている。この「際限のなさ」の概念はアーレントが反政治的とみなす「社会的なもの」に見出されるが、同時に政治的な行為の偶然性・予言不可能性を形容するためにも用いられていた。

寺井君は『革命について』においてフランス革命とアメリカ革命の決定的違いを刻印づけるのが自由と必然の区別であるとしたうえで、必然性の観念は断じて政治的な領域に持ち込まれるべきではないとアーレントが考えていたことを強調する。しかし行為を含む人間的な活動の性格が有

する偶然性・予言不可能性、すなわち「際限のなさ」が逆説的にも革命に必然性的性格をもたらし、しまつとすれば、逆手を取った形で「際限」こそが革命に自由の性格を与え、始められた革命に「持続性」を与える鍵となりえよう。

第二部第四章では制作という、行為とは異なり、従来のアーレント解釈では政治的なものとみなされてこなかった活動が持ちうる政治性が論じられている。そこではまず、法や芸術作品が有する世界構築的な性格に注目することによって「制作」という営みが政治的なものの持続性に大きく寄与することが指摘されている。もともと、アーレント自身によって「制作」という営みが政治とは無縁のものでされていることもまた事実であり、寺井君はそこで、労働／制作／行為という三つの活動の条件・様式・産物を改めて検討し直すことで、制作が反政治的とされるのは様式に基づいて分類されるときのみのものであり、その条件を世界性と定めつつ、制作された産物が世界に対して際限と耐久性を与えることによって、制作という活動が政治的な持続性に貢献できると結論づけている。

第二部第五章では、革命論に立ち戻って、アーレントが革命の成果を持続させるべく、いかに革命に「際限」を与えようとしたかが検討されている。フランス革命では法の

源泉を神格化された人民に求めることで法と権力を同一視し、際限のないものに陥ってしまったのに対して、アメリカ革命は人民と法の源泉を切り離し、法と権力を一致させないことで革命の持続性のある程度確保することができたと寺井君は述べる。それでは意見についてはどうであろうか。それは複数性や多様性の名の下に際限なく許されるものであるうか。世論という、誰のものともされないものによって専制に陥ってしまったフランス革命とは異なり、「公的見解を形成するための永続的な制度」として上院と最高裁判所を発明したアメリカ革命は、意見に対して「際限」を与える仕組みを有していた。先行研究においてしばしば「意見形成のための空間」としてアーレントが高く評価したとされる自然発生的な評議会制は、しかしながらより安定的な制度との摩擦から革命の成果に持続性を与えるには不十分であることが露呈する。そうであるとする、アーレントによって描かれるアメリカ革命の顛末は「始まり」の成功ではなく持続の失敗ととらえざるをえないだろう。持続性を重視しながらも「思考」と「記憶」の不在が故にそのことに結局は失敗するアーレントの革命論は、第一部で要請されていたような「新しい政治の科学」たりえていないというのが寺井君の評価である。

第三部が扱うのはこの思考の失敗という主題でもある。寺井君によると、革命論以降のアーレントは「直接の目撃者にはなり得ない出来事や既に失われたか忘れられてしまった出来事に対する注目の度合いを高め(一〇七頁)、その結果として「思考」の果たす役割を重視していくようになる。ここで重要なのは、二つの時間概念を区別して理解しておくことだと寺井君は主張する。われわれが日常的に有している、過去から現在を経由して未来へと連続的に流れゆく時間と過去と未来の間に「裂け目」を生じさせ断絶させる時間である。通常は過去との断絶をもたらすものと理解される革命であるが、寺井君はこの断絶にこそ、持続の契機が読み込まれるべきであると主張する。思考するということのこの重要性は、嘘ですら、事実の真理を意識的に否定し、事実を変更できるところの、人間が有する行為の能力であると認めるアーレントの独特な考え方にも窺える。もちろん、人間はいくらでも嘘をつくことができる。「際限のない」ものである。だからこそ、その嘘にも世界を破壊してしまうことがない限りという「際限」が課せられなければならない。寺井君から引用しておく。「人間に介入不可能な真理Ⅱ事実を人間的な領域で共有可能なリアリティに変え、リアリティを感じさせないような極端な嘘

や真理を政治的な領域から除外すること（一一二頁）」が肝要なのである。

それではなぜ「思考」が重要なのか。それはかつてわれわれが行為する際に「手すり banister, Geländer」の役割を果たしてくれる権威であった伝統が終焉してしまったからである。この伝統の終焉が、全体主義論においては無世界性の議論に、革命論においては「裂け目」の議論となって現れているのである。それでは政治的なものにふさわしい思考とはどういったものか。寺井君はハンガリー革命論に見られるイデオロギー批判、『人間の条件』で展開されていた「科学」批判、アメリカ革命論に登場する詩とアフォリズムへの高い評価の三つを具体例として挙げ、過去になされた行為や出来事と制作や思考との関係について考察が加えられている。引用する。「事実が制作によって保存され、思考によって『凝縮』されて、記録や芸術作品として維持され、政治的なものにとつての『天空と大地』——共通世界の支えとなる事実のストック——になる（一一九頁）」のである。

第三部の最後には、行為と思考の関係に注目する立場から判断の位置づけを示す目的で、アイヒマン論に関わる補論が付されている。アーレントが思考の重要性に着目する

ことになったのは『エルサレムのアイヒマン』でアーレントがアイヒマンの「無思考性 thoughtlessness」を糾弾したことに端を発するとする、従来からの主流的理解に対して、寺井君はそこでの主たる論点は、思考よりもむしろ判断との関係から位置づけ直されるべきであると主張するのである。

三 評価

アーレント研究は、洋の東西を問わず、近年ますます活況を呈してきている。日本も例外ではなく、二〇一五年には「アーレント研究会」（規模拡大と国際的連携に伴い二〇一八年には「日本アーレント研究会」と改称）が創設されたほどであり、日本人研究者によるアーレント研究も世界的に注目されるようになってきている。しかし、このようにアーレント研究の層が厚くなればなるほど、この分野でオリジナリティに富んだ業績をあげるのは困難になる。こうした状況においては、これまで誰も扱ってこなかった隙間産業的なテーマやテキストを扱うことよって独創性を出そうとするのがアーレント研究に限らずよくある研究手法であるともいえるが、寺井君は大胆にも、多くのアーレント研究者が共有する前提そのものを批判し、オルター

ナティブな解釈枠組みを提示しようとしている。こうした大胆な試みは大いに評価に値する。

具体的には、本論文は、アーレント政治理論を「全体主義批判」という出発点から『始まり』の概念を軸に『人間の条件』という著作を経て判断論に至る(一四三頁)ものとみなす森川輝一教授を代表とする従来の主流的解釈路線に対して、アーレントが展開する「持続性」をめぐる議論にもそのオリジナリティを見出し、それを軸に、「行為 action」のみではなく「制作 work」と「思考 thinking」をめぐるアーレントの議論に着目して彼女の政治理論を別角度から評価し直すという試みである。そのためにこれまであまり顧みられてこなかった『革命について』という著作を、政治体の持続をめぐるアーレントの破綻と寺井君が呼ぶところのものに着目して読み解く点に最大の特徴とオリジナリティを有するものである。

その際に思想的な探究は研究方法のアプローチとしては傍証的なものにとどまり(実際に本論文で紙幅が割かれている思想的な記述はアーレント研究者にとって広く知られた事柄が中心で、その点でのオリジナリティは特にあるように思われない)、むしろ本論文のもうひとつのオリジナリティは「不死性」や「際限のなさ」といった概念

分析にある。そのアプローチと精度・説得力こそが本論文のユニークさである。

しかし本論文の副題にもあるアーレント政治理論の「破綻」とは具体的に何を指すのだろうか。序章ではこの「破綻」には三つの含意があると論じられている。一つ目は従来のアーレント解釈でアーレントにおける政治的なものを中心とされてきた「行為」と「判断」が「制作」や「思考」という「非政治的なものを含む」ことだとされている。二つ目の破綻とされているのは、アーレントが標榜する「世界の共有」という構想、それ自体が共通世界に生じる「裂け目」を前提とすることである。そして三つ目がアーレントの政治理論が特に「持続」の問題をめぐって未完成に終わったことであるとされ、この三つの「破綻」に対応する形で、本論文は三部構成をとっているのである。

ところで、この三つをアーレント政治理論の「破綻」と呼ぶのはいささか適切さに欠けるのではなからうか。一番目のものは、研究視角の問題であり、アーレント政治理論そのものの破綻ではなく、従来の主流的アーレント解釈の破綻と寺井君がみなしているものに他ならない。二番目のものはアーレント理論における「裂け目」問題の重要性を指摘しようとする本論文の中心的主張であり、それを

「アーレント政治理論の破綻」と呼ぶのは適切であろうか。三つめの「破綻」とされているものも、未解決の問題が残されているから破綻しているのだと言ってしまえば、破綻していない思想家などそもそも存在しないだろう。すべての思想はその思想家の死によって、「未完成のトルソ」に終わらざるをえない宿命のもとにあるのである。

本論文は従来のアーレント解釈を覆そうとする野心作であるがゆえに、いわば「勇み足」も目立つ。そのひとつが「観想優位と労働優位の組み合わせ（二六頁）」という批判的主張である。プラトンに始まる「観想」優位の哲学の伝統と、それに伴う「活動的生 *vita activa*」への蔑視を確かにアーレントは批判した。また近代以降の社会における「労働」の全面化とそれに伴う行為・制作の喪失をアーレントが批判したことも周知の事実である。しかしその二つが「組み合わせられている」わけではない、アーレント自身がそのような書き方をしている箇所を本論文が指摘しているわけではない。アーレントの明示的な論述にしたがうかぎり、観想を優位においた代表的哲学者であるプラトンの発想は「労働優位」とは無縁であり、労働優位の思想を展開した代表者であるマルクスは「観想の優位」を完全に否定したのであって、この両者の組み合わせという発想を

引き出すことは困難であり、この両者に対する批判はそれぞれ別のものである。

本論文では「『人間の条件』の目的は、観想と労働の組み合わせが支配的な様式として持つ時間性から脱し、……永遠と区別された不死を理想とする領域における活動を再評価することにあつた（四二頁）」と述べられているが、永遠の真理を探究するがゆえに時間的世界に価値をおかないプラトンの観想と、生命過程をどこまでも維持するために行動を反復する労働社会の論理とが両立するような「時間性」とはどのようなものなのか、いまひとつ説明不足の感は否めない。

同じことは永遠と対置される「不死性」の理解にも言える。「不死が永遠に対比されて区別される持続の時間性（四二頁）」を意味するという寺井君の主張はそのとおりであるが、ギリシア的な「不死の名声」と、ローマ的な政治体（共通世界）の不死性とは、性格が大きく異なる。第三節で論じられる不死性は、引用箇所からいってもギリシア的な意味での「不死の名声」、すなわち世界ではなく自己の（物語的記憶の）不死性であるように思われるが、革命における「持続」を問題にするのであれば、ギリシア的／ポリス的な自己の不死性の希求とは区別された、ローマ

的な不死すなわち創設されたものの保存と増大こそが焦点になるのではないか。

革命における政治的なものの「持続」というテーマに照らせば、革命の持続を困難にさせ、それを破壊に追いやる「際限のなさ」(boundlessness)を分析する第二部の議論こそ本論文の核部分を成すものである。寺井君は、「人間の条件」のなかで「行為 action (邦訳書では「活動」と訳されている)を論じた第五章における「際限のなさ」(HC: 190 = 307)と、「革命について」でジャコバン派の哀れみを論じた第二章で指摘される感傷の「際限のなさ」(OR: 80 = 134, 90 = 148)とをパラレルにとらえ、ともに政治体の持続をおびやかすものと位置づけている。これは非常にユニークな着想であり、本論文のオリジナリティを示す視点であるが、そこにも若干の疑問がないわけではない。第一に、同じ boundless、ないし boundlessness という言葉が使われてはいるものの、「人間の条件」で言われている活動の際限のなさは、互いに異なる人々の自由な行為につきまとう偶然性・予言不可能性を指しているのに対して、『革命について』では、個々の人格的差異を無化して人々を二者に還元してしまう際限のない同一化を指しているわけで、ベクトルはまったく逆であるように窺える。「生命

過程になぞらえて革命を捉えることは、一人ひとりの人間を超えた有機体としての政治体を捉えてしまう点で革命を、際限をもたない『奔流』にしてしまう(五五頁)」と寺井君が述べるとき、そこで意図されているのは後者の『革命について』で展開されている意味での用語法であって、前者の用語法とは異なるように思われる。

そもそも、boundless、あるいは boundlessness という単語を、あたかもアレントが自覚的に哲学的含意をこめて使用した概念であるかのように扱うのがどこまで妥当なのか疑問も残る。というのも、もしそうであるなら、著者自身がキーワードとみなして付している索引で取り上げられているはずであるが、その痕跡はない。さらには第五章第二節で、「意見に「際限」をもたらず仕組み」として「純化と代表」を論じるくだりで、寺井君は「革命について」の次の一節、「その見解は際限もなく異なっているものであるから、やはり純化と代表を必要としているように思われる(九四頁)」(OR: 219 = 388)という文言を引用し、持続性を脅かす「際限のなさ」への警戒という『人間の条件』以来の問題意識にそって、アレントが「際限」を課す制度を評価したとも読めるような主張を展開しているが、邦訳書では「際限もなく異なっている」という訳語が当て

られているこの箇所の原文は“these views in their endless variety”であり、“boundless”という言葉は使われてさえないのである。

「實際のなさ」を鍵概念として『人間の条件』や『革命について』を読み抜く、というのであれば、アーレントがその語にどのような意味を込めたのかをテキスト上の典拠を明示しながら丹念に追跡するか、もしくは、その概念がアーレントのテキスト解明のために自己が用立てた分析概念であることを明示し、その意味内容をもっと明確に示したうえで独自の概念分析を進めるか、いずれにせよ論証の精度を上げる必要があるだろう。

いずれにせよ、本論文が従来 of 定説を覆し、独自の解釈方向を提示しようとするのであれば、これまでの解釈の問題点についてももう少し丁寧に整理・分析を行う必要があるだろうし、また随所で表現の生硬さ、分かりにくさが目立つ。寺井君が本論文を公刊するつもりがあるなら、もう少し分かりやすい表現に努めるべきであろう。

四 結論

以上のように問題や課題、疑問点は本論文において残されているものの、それらは全体として定説を覆そうとする

野心に満ちた本論文の致命的欠点とはいえず、本論文が博士学位請求論文として必要とされる要件は十分に満たしているとは判断できる。

以上より、審査員一同は、寺井彩葉君の本論文を博士（法学）（慶應義塾大学）の学位を授与するにふさわしいと判断し、その旨をここに報告する次第である。

二〇二二年五月二〇日

主査 慶應義塾大学法学部教授 堤林 剣
法学研究科委員

副査 慶應義塾大学名誉教授 萩原 能久
京都大学大学院法学研究科教授 森川 輝一